

鳥の話

香山

なにがし



むかしく、お日様の家來に鶏と鷺と孔雀と鳩
との四人がありました。
或日、お日様は四人の家來を呼んで皆に御用をお
いつけになりました。

先づ、鷺に仰しやるには、

日　お前はきれいな聲が出るから是から毎日一生懸命に唱歌のか稽古となさい。そしてお客様のあつた時は上手に唱つてお聞かせ申すのだよ」とお仰つて、今度は鶏に向つて

日　お前は大きな聲だ? 之から毎朝早く起きて大きな聲で鳴いて皆を起してお呉れ、それから忘れない様に毎日一づづ、卵を生むのだよ」とお仰しゃいました。それから今度は孔雀に向つ

日　お前は身體が大きいから家の掃除を頼むと
て

しよう、それから梟！お前は目が大きくて能く
何か見えるから門番を頼まう、能く番をして
野ら犬や盜坊猫の來ない様に氣を付けなさい

いなア、僕などは朝から晩迄大きな目ばかり開いて年が年中氣を付けて居なければならない。
アーハ、詰らないなア、」

とおひひ付けになりました。

是で皆夫れへ役目を申し付かつたので鶴は朝む日様が東の空に上りなさらうとすると大きな聲を出して「コケツコツカーお起きなさい」と呼ばつて皆さんを起します。すると皆さんは大急ぎで起きて来て鶴はホーケキヨ〜と唱歌の稽古に夢中になり、孔雀は褲がけてお掃除で大忙がし、梟は大きな目を一層大きくして門番をして居ました。

この様にして皆さんのが仲よくそじて勢よく働いて居ります中に一日たち二日たち三日たち四日たつと根が怠けめり、梟はそろ〜と怠け始めて、そしてブツ〜と不平を云つて居りました。

梟「ア、ア、僕ほど、詰らない事をして居る者はないなア、鶴は毎日朝から晩迄面白い歌を唱つて居ればよいのだし孔雀はお掃除して終へば用はないし、鶴だつて朝一度大きな聲を出して後卵一つ産めば、それで用はなしと云ふのだから甘

旦コレ梟！、お前は何處へ行つて居た？私の云

とブツ〜云つて居ました、そしてだん〜に朝起きることも怠け勝ちになり門番して居る中にも居眠りしてコツクリ〜船を漕ぎ出しました。そして遂々或日の事餘りさて來たので一寸門番小屋を抜け出して向ふの原へ土筆ん坊採りに鳥と一緒に遊びに行つてしましました。

何が儲て門番が居なくなつたのだから堪らない。猫は来る犬は来る、時々には狐や狸迄もノコ〜入つて来て臺所は勿論のこと、しまいにはヅーッ一しくなつて遂々或日のことお日様がお晝に召し上かるお飯のお菜を向ふ山の狸が来て戸棚の中で食べてしまひました。是を御覽になつたお日様は大層怒りになつて梟をお呼びになると梟は居ない。お日様は益ぶ怒りになる。其處へ梟は何時になくニコ〜と悦んで歸つて来ました。スルトお

「ひ付けたこと忘れたか？」とお仰しやると梶は不平面をして

梶「お日様、私は毎日湖から晩迄門番ばかりして居ましたから遊びに行づたんです。」と一向平氣なものです。お日様はそこで

梶「よし／＼お前は以來私の家來にはしまい。お前は今日から免職しよう。何處へでも勝手な處へ行つてしまへーとお仰しやいました。そして

鶯や孔雀や鶴をお呼びになつて、お前達は能云ふことを聞いておつとめをしたから今日は皆んなに褒美を遣らう、先づ鶯！お前は唱歌が大層上手になつたから是から始終歌を唱つて遊んで居て宜しい。そしてお友達に梅の花を遣らうとお仰しやいました」それで鶯は今でも梅の花の咲く頃になると飛んで来て美しい聲でホーケキヨと云ふて唱つて居るのです。それから鶴には

旦「お前には是がよからうとお仰しやつてお日様の奥様が冠ぶつて居らしつた冠を取つて鶴の頭に冠ぶせて下さいました。」

それで鶴は今でもきれいなトサカを冠つて居ますそれから今度は孔雀に向つてお前は家中のお掃除で喰骨折りであつたらう。それでお前の羽根が大層よびれたから、其代りにお前には美しいな羽根を遣らうとお仰しやいました。それで今でも孔雀の羽根はあの様にきれいなのだそうです。併し忘げたせいでありますのが可哀そにも梶だけは何の褒美も貰へず、ふまけにお日様から勘當されたので今でもお日様の前には出られませんから、晝間は木の繁みや洞の中にかくれて居て夜になると出て来ていたづらばかりして居ます。何とつまらないではありませんか。

機織り娘

硯山人

是もまた、怠けものゝ話、或處に大層な我まゝ娘がありました。姉さんは朝から晩迄母様の御手傳ひやら機織りやらで夫人は忙しい働き方ですが此我まゝ娘は手傳はふとも云ず、そとかと云